第十三回　神なき時代の幼児教育

「神は死んだ」とは一〇〇〇年に没したニイチェの言葉ですが、昨年ニイチェの本が大いに売れたらしく驚きました。

昨年といえば、「ゲゲゲ」が大流行。水木さんはのんのんばあによって妖怪の世界にいざなわれ、廣田衣世さんは、「お掃除をしないとお正月さまが来ないよ」と言うおばあさんに育てられ、トイレの神様というおばあちゃんへの感謝の歌がヒットしました。

一神教的な「神」は死んでも、多神教的な「神々」は死なないといわんばかりに、神々や妖怪、妖精、霊魂などは人々の関心から消えないようです。

ただ、神仏や地獄なんて存在しないという人が現代ではたくさんだと思います。（百歩ゆずって）仮に存在しないとしましょう。今さえよければいいというような自己中心的な人間が作っている社会と、思いあがらずわが身を振り返りつつ自分をちょっとでもよくしようとする人間が作っている社会と、どちらがまともだろう？　後者ですね。そのまともさをもたらすのは、「最後の審判」という神話と「死んだら終わりだから生きてるうちに楽しもう」という神話との、どっちでしょう？　神仏や来世が仮に存在しないとしても、社会をよくする装置としては必要なフィクションだと言えるでしょう。

大事なことは、行為の動機や抑止力がどこからくるかということです。「園長にしかられるから」、これも案外こわいらしいのですが（笑）、「地獄に落ちるから」というのはもっとおそろしい。そして動機としては深い。園長に叱られたくないからしないというのは逆に言えば園長が見ていなければするということです。抑止力は自分の外にあります。「地獄」の場合、他人が見てようが見ていまいが関係ありません。ですから、抑止力はより内発的になっています。

廣田さんは幼少期、「神様は爪の先から入ってくる」と聞かされたと前々回の園長通信でも紹介しました。「爪をきれいにしなさい」と言わずして、そうさせる。大人はやらせたいことを直に指示してしまう。片づけをさせたかったら「片づけなさい」と言葉で言う。それでかたづけるだろうと思ってしまう。片づけなければ怒ってしまう。大人がいかに言葉世界にズッポリはまっているかがわかります。

直接の指示によって人を動かす時、行為した人は「やらされた」のであって、自発的に動いたのではありません。

これは幼児教育の本質にかかわることです。子どもの自発性を育むためには、先生がああしろこうしろと言わない方がいい。幼児教育は指導したり教え込んだりすることを極力避けます。だから「環境による教育」なのです。環境設定に教師の狙いや思いや願いを込めるのです。子どもたちは自ら経験したり気づいたりするという仕方で学びます。すると、子どもが自発性をのばしつつ教師の思いも達成される。言葉も、指示語ではなく、子どもをそそのかすような、くすぐるような言葉が選ばれる。だから幼児教育って、ほんとむつかしいのです。

ところで冒頭のニイチェの言葉の真意は「究極の目的や最高価値の喪失」というニヒリズムのことで、「今後二百年の歴史だ」と彼は語ります。それで、「二十二世紀をむかえるために」なのです。

つ ら ら

つららができるなんて
何年ぶり？
こどもたちはもう つらら
のとりこです。

世の中を遊びごころや氷柱（つらら）折る

高浜　虚子

雪だるまの鼻もつらら

あそこにもつららだ！

登園の道すがら保護者の方が見つけて持ってきてくださったつららに子どもたちが集まります。

三人でもてるほど
おっきいぃ ！

軒下のながーい つらら。
どうやったらとれるだろうか、思案しています。
雪玉を投げてみますが、なかなかうまくはいきません。